

もよいから、要するに立派な結果が出ればよいのであるが、横に文字をよむ西洋の學者に、こんな資料を持つていかれたのは、なんだかあつけない様な氣持がする、ペリオ氏の稿の中には『日本人までが』クッチャ邊を探検したといふ様な文句が見えて居る、日本人は佛蘭西人などよりもはるかに此邊には緣故の深い國民である、なほ新疆の地に横はれる古王國の遺跡は、願はくば日本人の手によりて早く明かにしたいものである、近く敦煌家、敦煌派などの言葉が一部の人々の間に行はれて居る、ペリオ氏の發見が公やけにせられてからのことである、覆藏せらるゝ史料を摘出して、考證に考證を重ね、確乎動かすべからざる史實を得て、世界人文發展の跡を明らかにしやうとする人々を呼ぶ代名詞だと思ふ、吾等は此意味に於て多くの敦煌家の輩出を曉望し、敦煌派の隆盛を祈らざるを得ない。

(編者註、原文に挿入された敦煌千佛洞のさし圖二葉は、イラストラシオンからのものであるが、本文のさし圖は Pelliot, Les Grottes de Touen-Houang 中の同じ寫眞ととりかえることにした)

(藝文第一年第四號、明治四十三年七月)